

序章 文学の地図と境界線

1 フランス語マグレブ文学とフランス語圏文学

これから論じようとする「フランス語マグレブ文学 (La littérature maghrébine de langue française)」について、カギ括弧で括ったこの呼称は、「フランス語圏文学 (Les littératures francophones)」という研究領域が日本において定着するのと相まって、二一世紀も五分の一が過ぎた現在、既に一般化した感がある。研究上、便宜的に区分けされた比較的新しいこの領域の説明を要せずに本題に入ることが可能になったと言える。フランス語マグレブ文学研究は、一般にモロッコ、アルジェリア、チュニジアの北アフリカ三国で書かれるフランス語表現の文学作品を対象にするが、それでも「マグレブ」から始まって、いくつかあためて確認しておくべき点がある。

まず、「マグレブ」は前述した三国にモーリタニアやリビアも含めたアフリカ北西部の一角を指し、アラビア語で日の昇る東方「マッシュリク」に対して日の沈む西方をさす「マグリブ」がフランス語化した語である。「マグレブ」がフランス語由来であり、対象とする文学作品がフランス語であることを、この分野の文学研究の草分

けであるジャン・デジューの一九九二年に刊行された簡潔な概説書『フランス語表現マグレブ文学』を頼りに再確認しておく。マグレブにルーツをもつ現地民の作家の多くは、アラビア語やベルベル語を母語とし、フランス語は主に教育を通じて獲得した「他者」の言語であり、彼ら、彼女らは母語ではないフランス語を使って創作している。フランス語で書くことは、イスラームの文化に培われた母語の環境から解き放たれた「他者」の言葉の世界に身を投じることであった。この事実の背後にはまた、マグレブにはフランス語文学と同時にアラビア語文学があり、モロッコとチュニジアの文学作品刊行数では後者が多数を占めること、アラビア語母語の作家であっても書記アラビア語（正則アラビア語）は地域で方言化した口語アラビア語とは大きな隔たりがあり、コーラの言語でものを書くにはその習得が必要なこと、複数存在するベルベル語は文字を持たず、さらにマグレブは口語アラビア語、ベルベル語の口承文化が豊かに発達した地域であり、これらもまた「文学」と呼ぶべきであることもあげておく¹⁾。

「フランス語マグレブ文学」の「フランス語」というレッテルは植民地支配の刻印も語っている。それはとりわけフランスの統治期間がモロッコとチュニジアに比して長く、フランスの行政三県下に置かれたアルジェリアにおいて深いしを残した。多大な人的犠牲を払った戦争を経て独立したアルジェリア人の作家にとって、フランス語は「植民地支配の唯一のポジティブな獲得物」(Dejeux 1992, 4)であるという。フランス統治下のアルジェリアにおいて書記アラビア語の伝授と習得システムは壊滅的に壊された。マグレブの作家がフランス語でものを書くとき、程度の差こそあれ、アルジェリア人作家が否応なく巻き込まれる支配と従属の関係性が書く行為、そして作品に反映されるだろう。植民地支配を被った国で宗主国の言語で書かれる文学は、それ自体で自立した文学とみなされず、かつての支配国が形成してきた文学に従属する「周縁化され劣った」(Ibid. 92)文学とみなされる傾向がある。「フランス語マグレブ文学」は「フランス文学」の低位に位置づけられ、作家自身も往々にしてそれを感知している。不平等とも言えるこの関係は、「フランス語マグレブ文学」を「フランス語圏文学」

に置き換えると、事態はより明確になる。

フランスでのポストコロニアル理論と文学研究を論じるジャン＝マルク・ムラは一九九九年版の著書冒頭において、「フランスにおいて、フランス語圏文学研究 (Francophonie littéraire) もポストコロニアル理論も明確な概念を持っていない」と述べて状況説明しつつも、「フランス語圏」という語が該当する地域は「フランス語が明白に社会的な役割を果たす地域すべてとフランス語を第一言語とする話者が存在する地域(フランスを除く)すべて」(Moura 1999, 1. 引用者強調)と示し、フランス語圏という枠組にフランスを含んでいない。このことから「フランス文学」と「フランス語圏文学」の区分けが自ずと浮かび上がる。「フランコフォン(フランス語話者を意味する francophone)」という語は一八八六年、地理学者オネジム・ルクリュの著書『フランス、アルジェリアと植民地』で初めて使われ、アフリカ諸国が次々に独立する一九六〇年以降、フランス旧植民地との関わりにおいて度々議論されることになる。この語自体が植民地主義の歴史と密接に結びついており、二一世紀において「フランコフォン」という語は「禁句、NGワード」ともなりうるが、だからと言って「フランス語の (de langue française)」や「フランス語表現の (d'expression française)」などに言い換えると別の問題が生じると、『フランス語圏文学』を著したドミニク・コンブは指摘する (Combe [2010] 2019, 31)。「フランス語圏文学」とはイスやベルギー、カナダという地域も対象にするとはいえず、フランスの植民地支配の歴史とその従属関係を想起させる「フランス文学」の下位に位置づけざるを得ない文学なのだ。

「フランス語マグレブ文学」は「フランス語圏文学」のうちの一区分とみなされる。しかし、またそれは、ムラが英米圏で興隆したポストコロニアル研究を文学研究に連動して検討していくように、脱植民地支配以降の世界へ学術研究の視線が投じられてから盛んに読まれるようになった文学でもある。その第一世代に属する、チュニジアのユダヤ人出自のアルベール・メンシは被植民者の心的風土を論じた一九五七年——チュニジアとモロッコは一九五六年に独立した——の書で、マグレブ諸国がフランスから独立しアラビア語化が確立すればフランス語

の作品は遅からず消滅するだろうと予想したが (Memmi 1957, 142-146)、その予想に反して、この文学は独立後も質量ともに充実し、体系的研究も確立していく。フランス語マグレブ文学は当該諸国が独立してから本格化する、ポストコロニアル研究と深く結びついている。現在進行形のこの文学は、メンミ始めムルド・フェラウン、ムルド・マムリ、モハメド・ディブ、カテブ・ヤシン、ドリス・シュライビラ、問題作を世に出した第一世代から始まって、次世代、次々世代の作家へ引き継がれている。グローバルな規模での人の移動が日常になった現代世界において、マグレブ作家の「マグレブ」が指す枠組もそのかたちは恒常的に変化しているだろう。

2 日本におけるマグレブ文学研究

フランス語マグレブ文学が広く世界に周知されるきっかけは、デジューも指摘するとおり (Djéaux 1992, 3)、一九八七年、モロッコ出身の作家、タハール・ベン・ジェルーンのゴンクール賞受賞である。受賞作『聖なる夜』とその前編をなす『砂の子ども』(一九八五年)は、イスラーム世界の伝統的文化の諸要素を盛り込みつつ現代文学の実験性も試みた二部作であり、日本語も含めて四〇以上の言語に翻訳された。とりわけベン・ジェルーンのこの二作を中心に、「マイナー」なマグレブ文学周辺の研究が勢いづくのもこの頃である。九〇年代には、日本の大学でも本格的に研究が始まった。今世紀に入ると、鶴戸聡 (鶴戸 2012)、石浜裕子 (石浜 2016) がそれぞれ、カテブとフェラウンを主題に博士論文を提出している。翻訳も数を増やし、二〇一六年にマグレブ文学翻訳作品を集めた『叢書エル・アトラス』(水声社) が刊行開始され、継続中である。

研究が根づいていく九〇年代の指標の一つとして、一九九八年三月の日本フランス語フランス文学会関東支部大会 (埼玉大学) でのシンポジウム「マグレブ文学の現在」があげられる。マグレブに由来する作家に関心を寄せたフランス文学研究者四名 (石川清子、澤田直、福田育弘、渡辺芳敏) が、やはり同時期に「クレオール」の